

# 皮膚疾患でステロイド療法を受けている患者の思い

## 4階西病棟

○佐木 寛子 小橋かおり 西村なぎさ 増井 亜紀  
伊藤 真紀 上村由香里 東郷 和香 丹生 恭子

キーワード：ステロイド療法、皮膚疾患患者、思い

### I. はじめに

皮膚疾患患者の治療では、副腎皮質ホルモン剤（以下ステロイドと略す）の内服が必要とされる場合が多い。ステロイドの副作用は治療効果と共に強く現われ、患者の心理過程に影響を及ぼしている。既存の研究では、ステロイド治療を受けている患者の心理過程の分析<sup>1)</sup>、ステロイド副作用体験とノンコンプライアンスとの関連<sup>2)</sup>等について、「ステロイド剤は、著効である一方で副作用も大きく、不安や心配も大きい。それゆえ正しく内服されているかいないかは病態や予後に大きく左右するため医療者の役割も大きい<sup>1)</sup>」と報告されている。しかし、皮膚疾患で長期にステロイド剤を内服せざる得ない患者の思いを知り得るものは報告されていない。

当病棟において、長期にステロイド剤を服用しているにもかかわらず、副作用に対する知識に乏しく内服もれがあることや、初めてステロイド剤を内服するため医師から説明を受けた後、治療に対する躊躇を示した患者がいた。そこで、私たちは皮膚疾患患者の治療継続のためには、実際にステロイド剤を長期に内服している患者の思いを知ることが重要と考えた。その思いを知ることによってステロイド療法を受けている皮膚疾患患者に対して傾聴や共感、再教育指導、医師との連携を調整していく方向づけとなり得ると考えた。

### II. 研究目的

皮膚疾患患者のステロイド治療に対する思いを明らかにする。

### III. 研究方法

1. 研究デザイン : 質的研究
2. 対象数・特質 : 現在ステロイド治療を受けている入院中の患者2名とステロイド治療で入院歴のある外来通院患者3名(表1)
3. 期 間 : データ収集は平成13年9月から10月の期間で実施した。
4. データ収集方法 : 面接調査法とし、半構成的インタビューガイドに基づき、協力の得られた対象者に対して面接者2名が質問し、面接内容は許可を得てテープレコーダに録音した。面接時間は20~30分で行った。
5. データ分析方法 : 帰納的分析方法を活用した。面接用情報収集用紙及び録音テープから作成した逐語録を基に内容分析を行い、記述内容の類似性にそって分類、カテゴリー名をつけた。さらに抽出したカテゴリー間の関係性について検討した。

表1. 対象患者の背景

対象者	A	B	C	D	E
年齢・性別	73歳・女性	69歳・女性	48歳・男性	47歳・男性	33歳・女性
ステロイド内服量	プレドニ2錠/日	プレドニ3錠/日	リンデロン4錠と3錠/日 (隔日で内服)	プレドニ4錠と3錠/日 (隔日で内服)	プレドニ3錠と2錠/日 (隔日で内服)
服薬開始時期	S.57年頃	H.5 1月	H.11 8月	H.12 1月	H.12 7月

### IV. 用語の定義

『期待』とは、患者が治療によって“こうなりたい”と目標にしている姿に近づくこととする。

『あきらめ』とは、患者が自らの意志では“選択できないと断念する”事柄とする。

『依存』とは、専門性のある医師を頼りとして治療が成り立っている事柄とする。

『確信』とは、患者が治療の効果と体験から“固く信じて疑わない”事柄とする。

『不安』とは、治療に伴い起こってくる症状に対する“気がかりな心の状態”とする。

## V. 倫理的配慮

依頼文章により研究の目的や内容を説明し、同意書を得てインタビューを行った。研究への参加は自由意志であり、同意をした後でも研究への協力の中断・中止ができること、研究に参加しなくても医療や看護には関係ないこと、答えたくない質問には回答しなくてもよいことを伝えた。またインタビュー内容は録音する許可を得た後録音し、テープは研究終了後破棄すること、そして研究で得たデータは研究目的以外に使用せず、看護研究発表会等で発表することを説明した。プライバシー保護のため面接は個室で行い、疑問や不安には説明を加え承諾の得られた方を対象とした。

## VI. 結果

ステロイド療法を受けている皮膚疾患患者の思いを構成する要素として、『期待』『あきらめ』『依存』『確信』『不安』の5つのカテゴリーが抽出された。(表2)

『期待』の内容は、「副作用より効果のほうを取るのなら飲む」「治すためにはステロイドしかない」等、＜病状が良くなることへの期待＞、現在の状態を維持していくための＜病状が悪くならないことへの期待＞、＜副作用の少ない薬の出現への期待＞が抽出された。

『あきらめ』では、「身体に害があっても、仕方がない」等、＜副作用出現に対するあきらめ＞と、治療の選択肢がないことに対する＜他に治療方法がないことに対するあきらめ＞が抽出された。

『依存』では、医師に任せているとのデータから＜専門性に対する依存＞が抽出された。

『確信』では、「病気にとってステロイドは絶対不可欠」「痛いところに効いている」等、＜効果の実体験からくる確信＞が抽出された。

『不安』では、飲まなかったら余計に悪くなるという＜病状が悪化することへの不安＞と＜ボディイメージ変容に対する不安＞が抽出された。

表2 ステロイド療法を受けている皮膚疾患患者の思いのカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	ローデータ
期待	病状が良くなることへの期待	「副作用より効果のほうを取るのなら、飲む。」 「自分の体が痛くて保てないから飲んでる。」 「自分が治らないといけなければ、もうステロイドしかない。」
	病状が悪くならないことへの期待	「今の状態を維持していくのに、ステロイドを飲まないといけな。」
	副作用の少ない薬の出現への期待	「ステロイドとは違う薬があったらベター。」
あきらめ	副作用の出現へのあきらめ	「こわい薬と知っていても薬を止めることは出来ない。」 「長い間飲んだら身体のために悪いということはきいている。」 「体に害があっても、仕方がない。」 「体重増加、食欲増進が見られた時、医師に聞いたならそれが副作用といわれて仕方がない。」 「こわい薬だからあまり飲みたくないな—と思いますけどねえ…」
	他に治療方法がないことへのあきらめ	「それしかないから飲んでる。代用する薬が、たとえば選択肢が色々あればねえ…」
依存	専門性に対する依存	「素人は、教授達に任せているのが現状です。」 「病院にきたからには、先生の指示をきいた方が良いと思う。」 「先生の言う通りにしておいたら安心。」
確信	効果の実体験からくる確信	「病気にとってステロイドは絶対不可欠だと思う。」 「ステロイドは確かきくと思うんですよ。」 「今のところは必要な薬。」 「自分の体の痛いところに効いているという力がある。」 「自分が治らないといけなければ、もうステロイドしかない。」
不安	病状が悪化することに対する不安	「胃が悪くなる、肝臓、菌、眼など今自分自身の中でそういう風に変わっているのは当然気になります。」 「ステロイドを止めたいけれども止めたならリバウンドで前よりひどくなると聞いているから、飲んでるのが本音です。」 「飲まなかったら余計に悪くなる。」
	ボディイメージの変容に対する不安	「得意先の人達に顔や身体全体が全然変わってないので本当に治っているかと聞かれる。」 「ステロイドを止めたいのは、ムーンフェイスやお腹も膨れるし、やっぱりしんどいから。」 「肥えるというのは女の人にとってもね、いいことではないよね。」

## VII. 考察

### 1. ステロイド療法を受けている皮膚疾患患者の思い

『期待』では、皮膚疾患患者が期待を持つ理由として、病状が軽減することでステロイドの内服による治療効果を実感していること、自分が納得できる生活を送ることが出来ているということが挙げられる。『期待』をもつことで、今後もステロイドを飲み続けて病状を軽快させようとの前向きな気持ちへつながると考える。

『あきらめ』では、周りからの副作用出現に対する情報や副作用の実体験、飲み続けていても自分の思った姿に近づけないといった現状があるにもかかわらず、飲み続けないと生活が維持できない、自分にはステロイドの内服しか治療方法がないと受け止めているという思いがあると考えられる。

『依存』では専門性に対する依存があった。患者が今までに様々な治療を継続した中で、最終的には全面的に治療を医師にゆだね、医師の指示のもとで治療を続けていくことが良いと判断していた。

『確信』はステロイド内服による治療効果の実体験から来るものである。具体的には症状（痛み、皮膚症状、動けるようになった）の軽快、内服を自己判断で調節（中断）し症状が悪化した体験から、治療継続の必要性を強く実感したこと、様々な治療を受けた中でステロイドの効果が著明だったことが挙げられる。これらから患者がステロイドは自分にとって不可欠な薬であるということを感じている。個人差はあるが皮膚症状がある、痛みが強い、動けないなどの実在症状がある患者は、ステロイドの効果をより強く感じていると思われる。

『不安』では、副作用の出現や副作用の増悪、ステロイドを飲み続けること、今の生活が維持できなくなること、ボディイメージが変容し社会生活で他者にどのように受け止められるかということがある。とくにボディイメージは自己概念を構成させる重要な概念のひとつであり、アイデンティティーや自尊心、自己価値の概念でありその人の行動の基盤となっている。ボディイメージの変調は自己像の損失であり、社会的立場までも変えざるを得ない気がかりと考えられる。しかし、皮膚疾患患者はステロイドの内服で治療効果を得て、病状が回復し疾病前の生活に近づけることで、ステロイドの治療効果を実体験で知っていることから、これらの不安を持ちつつも内服している現状があるのではないかと考えられる。

## 2. カテゴリー間の関連性 (図1)

『依存』と『期待』の関係性については、「先生の言う通りにしておいたら安心」など、医師の専門性にまかせ治療を受け症状が良くなる中で、さらに良くなりたく、これ以上悪くならないという期待を持っている。ここで述べる『依存』を道具的依存（個人が自己の欲求を充足するために他人に頼ろうとする依存）としてみた場合、個々に持つ欲求が各々に満たされる、あるいは近づけるといった結果が得られることで、『期待』のカテゴリーに近づくことが出来るのではないかと考える。

『期待』と『あきらめ』の関係性については、「副作用より効果の方を取るのなら、飲む。」など、病状が良くなること、悪くならないことを期待する一方で「こわい薬と知っていても薬を止める事は出来ない。」「長い間飲んだら身体のために悪いということは聞いている。」という、薬の副作用の出現はあきらめているという相互関係があると考えられる。

『確信』と『期待・あきらめ』の関係性では、『期待』と『あきらめ』は相互関係にあるからこそ、『確信』との関係が成り立っていると考えられる。ステロイドを内服することで、効果があることを体験したからこそ期待し、副作用が出現したことをあきらめていると思われる。「自分が治らないといけなければ、もうステロイドしかない。」「病気にとってステロイドは絶対不可欠だと思う。」という『確信』を持ってステロイドを内服する現状がある。

『確信』と『不安』の関係性は、自らの実体験に基づいているものと考えられる。「ステロイドを止めたいけれども、止めたらリバウンドで前よりひどくなると聞いているから飲んでいるのが本音です。」「飲まなかったら余計に悪くなる。」という不安があるが、「ステロイドは確かに効くと思うんですよ。」「病気にとってステロイドは絶対不可欠だと思う。」という『確信』との相互関係があるのではないだろうか。

以上のようにカテゴリー間の関係性をみると、それぞれのカテゴリーはどれかひとつの概念が表立っているのではなく、それぞれの関係性の中で成り立っている。さらに各々の関連としては、患者がステロイドを内服することにより身を持って効果を体験したという事実がある。そしてそれぞれのカテゴリーが作用しながら存在しているのではないかと考えられる。

## VII. 結論

ステロイド療法を受けている皮膚疾患患者の思いには、『期待』『あきらめ』『依存』『確信』『不安』の5つの概念が存在していた。そしてそれぞれの概念が以下の関係性で成り立ち、ステロイド治療への思いがあること

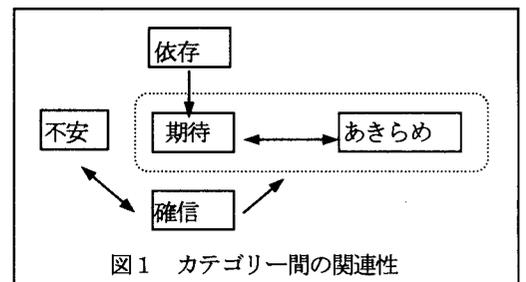


図1 カテゴリー間の関連性

がわかった。

1. 『依存』を自己の欲求を充足するために他者に頼ろうとする道具的依存ととらえた場合は、自己の目標に近づけるという『期待』と関係している。
2. 『期待』と『あきらめ』は「良くなるためならしかたがない」という相互の関係性をもっている。
3. 『期待』と『あきらめ』の相互関係のなかで、実体験をもとにステロイドを内服する必要性を『確信』している。
4. ステロイド治療に伴って発生する『不安』は、ステロイド治療は必要であるとの『確信』との間で、心理的に不安定な関係性をもっている。
5. 『期待』『あきらめ』『依存』『確信』『不安』のそれぞれの概念が相互的に関係して成り立っている。

私達は、皮膚疾患患者がステロイド治療に対するこれらの思いをもちながら内服治療を受けていることを理解した上で、前向きに治療が継続できるように働きかけていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 田中絵津子：ムーンフェイス出現時の心理過程の分析，第30回日本看護学会集録（成人看護Ⅱ），33 - 35，1999.
- 2) 濱野香苗：膠原病外来患者におけるステロイドの副作用体験とノンコンプライアンスとの関連，看護研究，30（6），491 - 498，1997.
- 3) 田村正枝：ボディイメージの変容した患者の看護，看護実践の科学，増刊号，93 - 95，1993.
- 4) 甲本敦子：SLE患者のステロイド療法中の食事のコントロール，看護技術，40（11），47 - 50，1994.
- 6) 宮崎康子：ステロイド服用による精神変調の関連因子を探る，第31回日本看護学会集録（成人看護Ⅱ），270 - 272，2000.

〔平成14年3月2日，高知市にて開催の平成13年度看護研究学会（高知県看護協会）で発表〕